

『反故集』の諺字

—『齊東俗談』とのかかわり—

古 屋 彰

一

『反故集』⁽¹⁾（元禄九年）冒頭の凡例中の一項に、

一或日雅生の書藏に遊て汗牛の反故をひらき侍りしに俳句有諺字あり吟しては閑を忘れ写しては塵を払ひぬ俳諧二卷を撰て世の笑草にせん諺字一冊を綴て机童にたよりす題して反故集と俳翁某片腸九回とそ豈おかしからずや

とあって、人冊には、諺字が、節用集の体裁にならって集められている。イロハ分けされ、意義分類され、更にその内部がほぼ一字語・二字語・三字語、、、の順に排列されている。右の凡例において、クネルに八九回Vの文字が宛てられているが、反故集人冊の諺字の中に

△腸九回Vが見えている。

この反故集の人冊が独立して『世話字尽』と名づけられて同じ版元から出版されていること⁽²⁾、また反故集の人冊を合類式に改題したものに「世話字合類大成」の名称が与えられていることなどから見て、諺字を世話字と認めてまず誤りないであろう。

二

反故集人冊の諺字の中に、

イバラシヤウビ 茨薔薇（2オ）
イムカセ 忽緒（3オ）
イツガハハレ 急廻（3オ）

のように左傍訓をもつものがある。これは、人冊に付された凡例中の一項

一左訓点三片言「仮勿」云也

に該当するものであろう。ちなみに、「かたこと」(慶安三年)を見ると、

一茨薔薇を。いばらしやうべん

一忽緒といふべきを。ゆるかせは如何。但ゆるかせは緩の字歟。いと。ゆは。五音通すれば。くるしからずや。緒のかせのゆるむことよりいひ初けるにや

一急がばまはれといふこと葉を急がばまはるといふはあしきこと葉かと云り。近き代の歌にや

武士の矢橋の舟ははやくとも

いそがばまはれ勢多の長橋

勢多からげと云こと葉も此所をまはる時より云そめたるにや

とある。

これらに対して、主として一字語の左傍にその漢字の字音とおぼしきものを付した例が見られ、この一類は、『和語対類』(天和二年)の「奇字類」(和語対類続集の奇字類が「字林拾葉」—延宝八年—を資料として成った

ことは別稿に触れた)に一脈通ずる性格をもっている。つきに、そのすべてを挙げて、和語対類の奇字類、および字林拾葉と対照する(三者間にそれほど大きな異同の見られる例がないので、和語対類・字林拾葉に関して、文字・右傍の訓・左傍の音・注記の中反故集と異同のある項についてのみ記す。従って、特に記してない他の項については、すべて反故集と一致することを意味する)。

(反故集)

(和語対類)

(字林拾葉)

爾(4ウ)	○	爾(4ウ)	○	爾(4ウ)	○
寶(6オ)	○	寶(6オ)	○	寶(6オ)	○
益(7オ)	○	益(7オ)	○	益(7オ)	○
遠(8オ)	○	遠(8オ)	○	遠(8オ)	○
悲(10ウ)	○	悲(10ウ)	○	悲(10ウ)	○
噓(10ウ)	○	噓(10ウ)	○	噓(10ウ)	○
巽(11オ)	○	巽(11オ)	○	巽(11オ)	○
梅(11オ)	○	梅(11オ)	○	梅(11オ)	○

租也年貢 (16ウ)	近 (16ウ)	密和 (16ウ)	念熟 (16ウ)	純 (14オ)	鷄ノ腹病也 (14オ)	格 (13ウ)	俣 (13オ)	嬪 (13オ)	勞以肩 (12ウ)	謎片宮 (12オ)	控 (12オ)	虎 (12オ)	登 (11ウ)	封識多 (11オ)
○キナ	○	○キト	○	○	○	○	○	○	○	○也	○	○	○	○
○又税征並ニ		名順和	也寝熟		馬ノ腹瘻		身		物也	片宮			同又替	

再 (29オ)	鰯 (28ウ)	鰯 (28ウ)	枝 (27ウ)	提 (25オ)	頤 (25オ)	餅經詩 (22ウ)	宴 (21ウ)	飲酒 (19ウ)	窓 (18ウ)	罷 (18ウ)	痲 (18ウ)	痕和順 (18ウ)	華 (18ウ)	祝和順 (18ウ)
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○也	○	○	○	○	○
				同又英			同		多疑		漆瘡	名順和		名順和
○	○	○	○	同又英	○	○	同	又酒	多疑	○	○	順和名	○	○

鴟 <small>ヒノカミ</small> (29オ)	○	鶺鴒 <small>ヒノカミ</small> (29オ)	○
鴟 <small>ヒノカミ</small> (29オ)	○	鶺鴒 <small>ヒノカミ</small> (29オ)	○
鶺鴒 <small>ヒノカミ</small> (29オ)	○	鶺鴒 <small>ヒノカミ</small> (29オ)	○
鶺鴒 <small>ヒノカミ</small> (29オ)	○	鶺鴒 <small>ヒノカミ</small> (29オ)	○
鶺鴒 <small>ヒノカミ</small> (29オ)	○	鶺鴒 <small>ヒノカミ</small> (29オ)	○
鶺鴒 <small>ヒノカミ</small> (29オ)	○	鶺鴒 <small>ヒノカミ</small> (29オ)	○
鶺鴒 <small>ヒノカミ</small> (29オ)	○	鶺鴒 <small>ヒノカミ</small> (29オ)	○
鶺鴒 <small>ヒノカミ</small> (29オ)	○	鶺鴒 <small>ヒノカミ</small> (29オ)	○
鶺鴒 <small>ヒノカミ</small> (29オ)	○	鶺鴒 <small>ヒノカミ</small> (29オ)	○
鶺鴒 <small>ヒノカミ</small> (29オ)	○	鶺鴒 <small>ヒノカミ</small> (29オ)	○

三

字林拾葉や和語対類を資料として世話字を拾いとることは、特に元禄期ごろでは決してめずらしいことではなく、その意味で、反故集も例外ではない。しかし、一方で、反故集の諺字の中には、一般の世話字尽にあまり見られない語も目立つ。例えば、つぎのようなことわざ風なものがまじっている(▽印以下は、上欄の注記)。

- ①石言イシコト 左伝 (2オ)
 ②井蛙不知大海イヅカハシラニ 見ユ (2オ)
 ③一樹蔭一河流イツツキニ 未考 (2ウ)

- ④麻中蓬子アサノハカニ (25オ)
 ⑤虎為鼠トラノミツ (7オ)
 ⑥念力透岩ネンリキハツ 祖庭 (17オ)
 ⑦取御トルミ 祖庭 (10オ)
 ⑧蓼虫玉露ルイチュウ (14オ)
 ⑨念力透岩ネンリキハツ 祖庭 (17オ)
 ⑩雲泥万里ウンニハシ 李白 (19オ)
 ⑪用管ヨウカン 天莊子 (20ウ)
 ⑫吹毛求疵フクモウ (22オ)
 ⑬虎狼野干コウロウ 法華經 (23ウ)
 ⑭祖庭事苑ソトニ 云野干与狐不同野干小形大尾能登木也声如狼

▽語ニ日李君之箭走而穿堅石一漢書

⑩雲泥万里ウンニハシ 李白 (19オ)

⑪用管ヨウカン 天莊子 (20ウ)

⑫吹毛求疵フクモウ (22オ)

▽韻府日毛縫物吹尋求疵也

⑬虎狼野干コウロウ 法華經 (23ウ)

▽祖庭事苑ソトニ 云野干与狐不同野干小形大尾能登木也声如狼

⑭麻中蓬子アサノハカニ (25オ)

▽太平記鈔ニ昔白拍子ノ謡タル謡也ト

④馬耳風バミツ 東坡集 (4オ)

⑤虎為鼠トラノミツ (7オ)

▽文選答客難見リ古歌ニモ虎トノミアガメラレ

シモ昔ニテ今ハ鼠ノアナウ世ノ中

⑥綸言ロンゴン 如汗記 (8ウ)

⑦取御トルミ 祖庭 (10オ)

⑧蓼虫玉露ルイチュウ (14オ)

⑨念力透岩ネンリキハツ 祖庭 (17オ)

⑮ 九牛之一毛文選 (27ウ)

右の中には、⑧「一樹蔭一河流」のようにやや異質なものもあり、またかなり日本化した言いまわしものもまじるが、これらの例は、注記をも含めて、「齊東俗談」(貞享二年)との何らかのかかわりを思わせるものがある。つぎに、齊東俗談卷七「世諺部」の関連記事を用する。

① 石ノ言世ノ習 (7オ)

昭公八年左伝曰、

② 井中蛙 (1ウ)

、、、莊子秋水篇罔井蛙謂東海鰲ノ語アリ

③ 一樹之蔭 (6ウ)

諺一樹ノ蔭ニヤトリ一河ノ流レヲ汲モ皆是他生ノ縁ト云コト出処アリヤ太平記鈔昔白拍子ノウタヒタル謡ナリ、

④ 馬耳東風 (2ウ)

東坡集十二、

⑤ 虎鼠 (4ウ)

東方朔答客難、、、虎トノミアカメラレシモ昔ニテ今ハ鼠ノアナウ世中

⑥ 綸言如汗 (3オ)

下学集曰礼記、

⑦ 猥座 (4ウ)

韻府曰、、、コレヨリ御猥ノ座ヲトルト云コト

ハジマル

⑧ 夢虫 (3オ)

鶴林玉露曰、

⑨ 念力透岩 (4オ)

、、、漢李広北平ニ狐ス草中ノ石ヲミテ虎ナリ

ト思ヘリ弓ヲ引テ射之石ニ中リテ鏃ヲ没ス祖庭

事苑曰、

⑩ 雲泥万里 (1ウ)

、、、李白詩、

⑪ 管見 (3オ)

、、、莊子秋水篇是直用管窺天、

⑫ 吹毛求疵 (1ウ)

、、、韻府曰漢武帝議權抑諸侯王奏其過惡吹毛

求疵俗ニ吹毛求過怠之疵毛縫ヲ吹タツネテ疵ヲ

求ルコトク細ニ過惡ヲサクリ求テ却テ災トナル

ヲ云ナリ、

⑬ 狐狼野干 (5オ)

四字連統法華經ニミヘタリ野干与狐不同野干形

小尾大ナリ能登木狐即形大ニシテ木ニノホルコ

トアタハス祖庭事苑野干、声如狼

⑭ 麻中蓬 (3オ)

荀子勸学篇、

⑮ 九牛一毛 (3ウ)

文選司馬遷書、

以上のように、全体としてみると反故集が齊東俗談と何らかのかかわりをもつように思われるが、個々の例から両者の関係を積極的に裏付ける事実を指摘することは容易でない。

反故集⑫「吹毛求疵」の上欄注に

韻府曰毛縫物吹尋求疵也

とあるが、「韻府」に「毛縫物吹尋求疵也」の記事は出ない。これは、齊東俗談⑫の

韻府曰漢武帝議推抑諸侯王奏其過惡吹毛求疵俗ニ吹

毛求過怠之疵毛縫ヲ吹タツネテ疵ヲ求ルコトク、

のような記事を見て、実は韻府の引用が傍線部分で終

ているのに、更に以下にまで及ぼして誤解したために生

じたことではなからうか。もっとも、齊東俗談で漢字片

カナまじり文であるものが、反故集では漢文式に書かれ

ているという違いはある。しかし、漢文を漢字片カナま

じり文にして引用したり、逆に、漢字片カナまじり文を

漢文式に改めてとり入れたりすることは、当時としてそ

れほど不思議なことではない。反故集では、簡潔さが求

められて漢文化するのであろう。特に今の場合、「書言

故事大全」(正保三年、和刻)に

吹毛求疵(卷十二、26オ)

求多端曰吹毛求疵深求隠僻吹開毛縫以求瑕疵

とある「吹開毛縫以求瑕疵」が原形で齊東俗談の記事はそれを訓み下したものと認められるので、反故集における再漢文化の線は充分に考えられるところである。

反故集⑬「虎狼野干四字連法花經ニ」の上欄注に

祖庭事苑云野干与狐不同野干小形大尾能登木也声如狼

とあるが、「祖庭事苑」(正保四年、和刻)に「野干与狐不同」の文言は出ない。これは、齊東俗談¹⁸⁾の

四字連統法華經ニミヘタリ野干与狐不同野干形小尾大ナリ能登木狐即形大ニシテ木ニノホルコトアタハ

ス祖庭事苑野干梵云悉迦羅又名夜干或名射干声如狼のような記事を見て早とちりをした結果と言えなくもない。が、先の例ほど単純ではない。というのは、齊東俗談の記事の中で祖庭事苑に出たと思われる部分が傍線部aとbの二箇所に分かれ、a部分が出典名「祖庭事苑」の前に位置していて齊東俗談の記事自体に問題があるだけでなく、「野干与狐不同」の文言がさらにその前に位置しているからである。しかも、「和爾雅」(元禄七年)に

野干(卷六3オ)

和名抄引考声切韻云、或云野干与狐不同野干形小尾大而能登木狐形大而不能登木祖庭事苑云野干梵云悉迦羅又名夜干或名射干声如狼

とあって、齊東俗談と和爾雅が共に拠った他の文献の存在も予想される。このようにその様相がきわめて複雑であって、この例(上欄注)は、齊東俗談と反故集を積極的に結びつける資料とはなしがたい。ただ、法華經に出る「狐狼野干」の狐を虎に引き当てながら、なお「四字連統法華經」の注記を残しているところに、齊東俗談とのかかわりを断ち切りがたくしているものがある。

かくて、反故集にあって齊東俗談卷七「世鏝部」との関係をやや積極的に裏付けるかと思われる個別例は、⑫「吹毛求疵」の上欄注と、他に⑬「虎狼野干」の注記のわずかに二例だけである。

そこで、両者の関係をさらに確かめるために、齊東俗談の他の諸巻にも目を向けて、同様の方法で反故集との比較検討を試みる。

四

齊東俗談卷一「典故部」は、凡例によれば(訓点は例語のよみだけを残し、また例語の間に・点を加える。以下同じ)

一 我國俗語有涉倭唐故事者有因仏氏說者所謂指南・

逆鱗・藏六・江帥之類皆是蒐獵為典故部

となる。見出語は八什物以下四十八語であるが、解説文中に出る見出語の異表記や関連語・類語なども含めて、反故集の諺字との関連を指摘する。対照するに當つて、省略部分は、を以て示し、訓点は適当に取捨する。

(齊東俗談)

① 権輿 (2オ)

詩經秦風權輿註

ゝゝ、俗何ノハ

ジメモミヘヌコ

トラケンニヨモ

ナキト云ハ即權

輿モナキナリ

② 杜氏 (3オ)

ゝゝ、蒙求ニミ

ヘタリ俗酒ヲ釀

スルモノヲ酒杜

(反故集)

無権輿經 (22オ)

杜氏蒙求 (7オ)

③ 北叟 (3ウ)

氏ト云蓋杜康ト
云人初酒ヲ造ユ
ヘニ今モ其ミチ
ヲシルモノヲス
ベテ杜氏ト称ス
ルナリ

俗憂喜心ニト、

メズイツモ機嫌

ヨキカホヲ北叟

顔ト云ヒ北叟咲

ト云塞翁故事ヨ

リ云リゝゝ、

④ 修羅 (4ウ)

ゝゝ、俗石引車

ヲ修羅ト云大石

帝釈音相似タ

リ阿修羅帝釈ヲ

動義ヲトレリ

北叟笑翁 (5ウ)

修羅石引 (30ウ)

▽帝釈大石音相似故

⑤ 包丁 (5オ)

、、俗子馬蚊マシ

ヲ梶原トスルハ

景時ノ音ヲ用フ

⑥ 無恙 (5ウ)

、、俚俗何ノ

コトモナキニ今

メカシク用意ス

ルコトヲツガモ

ナキト云ハツ、

ガモナキノ中略

ナリ

⑦ 折檻 (6ウ)

、、其後成帝

朝朱雲又帝ノ師

安昌侯張禹ヲ斬

ト奏セシ罪ニヨ

リテ御史朱雲ヲ

ヒキイテ殿上ヲ

馬蚊マシフハ景時ノ音ヲ用ト

(21ウ)

▽或曰无恙ノ略トイ

カ、ノ

折檻 (34オ)

▽前漢六十七成帝朱

雲之依上書怒欲斬

佞禹御史將雲去雲

攀折殿檻矣

クダル朱雲檻ヲ

攀テ檻折タリ、

、、朱雲カコト

ハ前漢書六十七

ニ伝アリ、、

⑧ 折檻 (6ウ)

漢元帝時朱雲ト

云モノ、、諸

儒為之語曰五鹿

嶽々朱雲折其角

、、コレヨリ

折角ト云コトバ

オコレリ、、

⑨ 藏六 (7ウ)

祖庭事苑曰、

、

⑩ 蔣次シヤウジ (8オ)

野槌曰、、

⑪ 正職 (8ウ)

折角 (34オ)

▽語曰五鹿岳々朱雲

折其角

藏六事 (15ウ)

祖庭事苑

无蔣次シヤウジ野 (17ウ)

野槌

正職シヤウジ物ノ至極也 (34オ)

聚分韻略、

俗十分至極スル

コトヲセイサイ

ト云ハ正載ナリ

⑫東西（9ウ）

鶴林玉露曰、

倭俗相撲物見

場ノ騷動ヲ下知

スルトキ東西ヲ

呼テ南北ライハ

ズ、

⑬軻遇（10ウ）

日本紀一曰、

俗物ノコガレ

クサキヲカグ、

サキト云ハ軻遇

臭ナリ

⑭朝榜（10ウ）

埴藝抄曰六条内

東西ミミ騷動下知ノ詞也
鶴林玉露詳

（8オ）

軻遇臭日本紀（12オ）

無朝榜（23オ）

府有房卿説曰上

古蒔絵銅細工等

皆朝家ヨリ被下

榜不堪之者无彼

榜故世間ニ非細

工ナルモノヲ無

朝榜ト云ナリ、

、

⑮小兒（11オ）

江次第曰、

或曰俗始ニ食コ

トヲ小兒ト云ハ

菓子ヨリ起ル、

、

⑯小兒（11オ）

江次第曰、

次後取ヲ召テ御

酒盞御饒子等ノ

余分ヲ飲シム、

▽埴藝云上古細工人

自朝家被下榜不堪

之者无彼榜一不

調法非也

為小兒江次第詳（9ウ）

後取一江次第（31オ）

、後ニ食ヲ後
取ト云モ此義也

⑪四度解(11オ)

延喜式、、解

由明ナラザレハ

公卿官税手ヲ下

トコロナシコレ

ヲ四度解ナシト

云トイヒツタヘ

タリ

⑫江帥(12オ)

野槌曰、、世

ニガウソツナル

モノト云詞モ江

帥字ナリト云ナ

ラハセリ今ガサ

ツモノト云ハガ

ウソツノ転ズル

ナリ、、

无四度解(31ウ)

▽延喜式詳也

江帥者野槌(11オ)

⑬遠格(12オ)

、、職原抄、

⑭元興寺(13ウ)

、、今世ノ小

児ヲ職恐モノ目

ヲ怒カシ口ヲ開

テ呼テ元興寺ト

云ハコレ元興寺

ニ昔鬼アルイハ

レナリ詳ニ本朝

神社考ニミヘタ

リ

⑮向火(14ウ)

日本武尊、、

向火タカレシコ

ト日本紀ニミヘ

タリ、、俗コ

トモナキコトラ

遠格抄(3オ)

元興寺ガゴウジ職恐少児詞也
神社考詳(11オ)

乞火(33オ)

▽无由使他立腹云ー

也倭武尊向火事迹日

本紀詳也

イヒツノリテ人

ニ立腹セシムル

コトヲ火ヲ乞^{コッ}ト

云向火ツクルト

云ハコノユヘナ

リ、、、

以上の二十一例を眺めるとき、齊東俗談において漢字片カナまじりであるものが反故集において漢文式に書かれている例は、ここでも目につく。たとえば、反故集の⑦「折檻」の上欄注などは、いかにも原典そのままを引用したようにも見えるのだが、漢書朱雲伝の文章では決してない。同じく⑩「無朝勝」の上欄注に「堪^{タカ}云、、」としながら、堪^{タカ}鏑の文章そのままではない。また、⑫「乞火」の上欄注なども、齊東俗談のような記事を簡潔に漢文式に書き改めたものであろう。このようなことを考慮に入れば、全体としては、反故集が齊東俗談と何らかのかかわりを持つように思われるのだが、個々の例から両者の関係を積極的に裏付ける事実を指摘するととなると、やはり容易ではない。

⑪の場合、反故集に

正載^{せいさい}韻略^{うんりやく}
至極也

とあるが、実は、「韻略」に「正載」の語はなく、「祐」の項で「千生万、、、正生載載地所不能載也」と風俗通の言を引いているのみである。齊東俗談がその衆分韻略の記事を引用したのは、

俗十分至極スルコトヲセイサイト云ハ正載ナリ^{せいさい}

と「正載」の根拠をそこに求めようとしたのであろう。もちろん、反故集にあっても、たまたま齊東俗談におけると同じ意味での注記をほどこした可能性は無くはない。しかし、そのような偶然の重なりを考えるよりも、反故集が齊東俗談のような記事に拠って右のごとき注記を加えたと見る方が自然であらう。

⑬の場合、反故集に

軼^{てい}遇^う吳^ご日本紀^{にっぽんき}
焦臭也

とあるが、これも右の例と同様に「軼遇吳」が「日本紀」に出るわけではなく、その語の原拠を日本書紀の「軼遇突智」に求めた齊東俗談のような記事に拠った注記であることを想像させる。

その他、たとえば①の場合、反故集に

無権輿ケンモナキナリ詩

とあるが、詩経には八権輿Vの形で出る。齊東俗談は、詩経を引いて八権輿Vの語義を説明した後、

俗何ノハジメモミヘヌコトラケンニヨモナキト云ハ
即権輿モナキナリ

と述べている。反故集の語表示と注記は、かかる記事に拠っていると見られなくもないが、この程度の語の拡大や縮小はいくらか起り得ることのようにも思われるので(⑩の場合の八藤次V→八无藤次Vなどのように)、以下一々指摘はしない。

五

齊東俗談卷二「凡言部上」は、凡例によれば

一 綸言・近習・機嫌・塩梅等之語古来伝称出処顯然

或不必要出処自与音義不相背者亦有之如義理・

行迹・時宜・会釈之属也訓釈而為凡言部

となる。見出語は八綸言V以下八十九語であるが、先の

例にならって、反故集の諺字との関連を指摘する。

(齊東俗談)

① 塩梅 (1ウ)

尚書説命ニ出タ

リ羹ヲ和スルニ

ハ必塩ト梅トラ

用ルナリコレヲ

塩梅ト云、

② 余慶 (2オ)

易坤文言、

③ 活計 (3オ)

、、詩格三、

④ 安堵 (3ウ)

字書堵堵也堵堵

ヲ安スルトハ諸

人其所ニヲチツ

イテウツリ助ザ

ルヲ云史記高祖

紀、

(反故集)

塩梅アンバク尚書 (25ウ)

余慶ヨケイ易周 (13ウ)

活計カクケイ詩 (20オ)

安堵アンド史記 (26オ)

⑤交割カウカウ（4才）

、、、紫陰比事

曰、、、

⑥世智便セチベン（4ウ）

下学集世智便世

俗恪惜之義也沙

石集、、、

⑦三昧サンマイ（5才）

、、、俗常ニ他

念ナキコトヲ云

リ

⑧消息シヨウソク（5ウ）

礼記月令註、、

、韻会曰消息音

信也

⑨最負ヒイヤ（6才）

文選張平子西京

賦、、、薛綜曰

最負作力之貌也

交割物詳也カウカウモノ（13才）世智便セチベン恪惜之義
沙石詳（34ウ）三昧サンマイ云一一无他念
（27才）消息シヨウソク礼記リキ音信也
（31才）最負ヒイヤ（33才）

▽文選註作力之良也

⑩偏頗ヘンペン（6才）

韻会頗頭偏也又

偏頗不正也、、

⑪邂逅コウコウ（6ウ）

詩經野有蔓草註

邂逅者不期而会

也

⑫欸ク狀ハシヤウ（8才）

野槌曰、、、○

又目案ト云コト

ハ、、、今俗案

ヲ以テ安トシ又

倭訓ラクハヘテ

目安ト云ナリ

⑬普請フシン（9才）

家造コトヲ普請

ト云ハ沙門ノ語

偏頗ヘンペン（33才）

▽韻会不正義

邂逅コウコウ詩經注一不期而会也
（14ウ）
邂逅コウコウ（10ウ）欸ク狀ハシヤウ野槌詳（20才）普請フシン義也一積氏語也（23才）

ナリ普諸人ヲ招

請シ其多力ヲ得

テ事ヲナス義ナ

リ、

⑭ 丈夫 (9ウ)

俗男子ノ健ナル

ヲ丈夫ト云、

⑮ 丈夫 (9ウ)

、

、

ト云ハ惡所岩石

モ乘ニ堪タル義

也、

⑯ 丈夫 (9ウ)

、

堪ヲブガント云

ハ歩艱ナリ、

⑰ 牛角 (11ウ)

、

品ニ、

⑱ 有想 (12オ)

俗トリマシヘタ

ルコトヲウソウ

ムゾウト云法華

經、

形有想無想、

⑲ 家礼 (14ウ)

、

原抄家礼字ヲ用

フ、

⑳ 若干 (15ウ)

漢賈誼伝、

㉑ 若干 (15ウ)

、

万トカキテソコ

牛角事 法花經 (24オ)

有想無想經 法花 (19オ)

家礼原 (21ウ)

若干 漢書 (15ウ)

千万葉万 (15ウ)

ハクトヨメリ、

、

以上の二十一例の中、反故集の⑭△丈夫△の上欄注は

齊東俗談と無関係なことは明らかであり、つづく⑮△岩乗△の注記なども存疑扱いすべきものであるが、⑭と⑮と⑯が齊東俗談では一項目中に出るので一応挙げておいた。全体してみると、やはり、反故集が齊東俗談と何らかのかかわりをもつように思われるが、個々の例から両者の関係を積極的に裏付ける事実を指摘することは、容易でない。

齊東俗談にしたがって⑭と⑯とに分けた△最負△△偏頗△は、反故集では△最負偏頗△として△の部に収められている。もちろん、この語は熟して用いられることも多いので四字語として反故集に出ておかしくはないのだが、上欄注に

文選註
最負 作力之
良也

偏 頤會
不正義

と二語にわけて注文が付されているのは、やや異様であ

る。やはり、△最負△△偏頗△の隣接する見出語として出る齊東俗談のような記事をふまえたための現象ではなからうか。

⑯の場合、反故集に

牛角事法花經

とあるが、「法華經」に△牛角△の語はなく、齊東俗談は「法華經譬喻品ニ首如牛頭科註我見ニ依テ辺見ヲ起ス牛頭ノ兩角ノ如而已」を引用して

牛角ト云コトコレヲ証トスヘシ

とその根拠を求めたのである。△牛角△の典拠を法華經とするのは一般ではないし、反故集の注記は、やはり齊東俗談のような記事に拠ったためのものと見られる。

六

齊東俗談卷三「凡言部下」は、卷二につづく凡言部の後半に当る。見出語は△元服△以下七十七語であるが、先の例にならって、反故集の諺字との関連を指摘する。

(齊東俗談)

① 目礼 (1ウ)

太平記鈔日路頭

ニテ人ニ逢トキ

ミヤリテ礼容ス

ルヲ目礼トカイ

ヘトモ目ノ字ア

シ、囁礼ナルヘ

シ、

② 大格 (1ウ)

、、、壺囊抄、

、、、

③ 時宜 (2ウ)

、、、曲礼曰、

、、、

④ 時宜 (2ウ)

、、、○又色代

或曰代易也人ヲ

礼シテ顔色ヲ変

(反故集)

囁礼記 (33ウ)

太平記

大格壺囊 (14ウ)

時宜礼曲 (31オ)

色代 人敬 (31オ)

易スルハ敬ノ至

ナリ

⑤ 烏乱 (3オ)

下学集、、、又

作胡乱、、、

⑥ 吹嘘 (3ウ)

書言故事曰、、

⑦ 張本 (5オ)

書言故事曰、、

⑧ 由緒 (5オ)

、、、首楞嚴經

、、、

⑨ 破顔 (5オ)

、、、語錄等ニ

ハ多云コトナリ

俗笑コトヲ破顔

ト云ナリ

胡乱学 (19オ)

下

胡乱学

吹嘘古事 (35オ)

書言

張本古事 (8ウ)

書言

由緒 (28ウ)

楞

破顔 笑事也 (5オ)

破顔

笑事也

破顔

⑩ 零落 (6オ)

、、毘賣行、

⑪ 放埒 (7オ)

、
下学集、、

⑫ 旦暮 (7オ)

、、俗家ヲ治

ルニ儉約ナキモ

ノヲ無^レ旦暮ト

云、、愚ノ甚

シキナリ、、

⑬ 聊爾 (9オ)

、、論語注率

爾輕遽之貌ウチ

ツケトヨメリ

⑭ 觀面 (9オ)

儀礼賤礼、、

⑮ 贓物 (11オ)

下学集贓物盜物

零落 (15オ)

放埒集 (4ウ)

无旦暮也 (14ウ)

卒爾語 (18ウ)

觀面礼 (24ウ)

贓物也 (15ウ)

⑯ 粉骨 (11オ)

也、、

、、俗又勞ス

ルコトラ骨折ト

云、、名義集

⑰ 歴二 (12オ)

、、○後漢鄧

隨伝注臣賢按古

書字当再読者即

於上字之下為小

二字、、

⑱ 風流 (12ウ)

、、後漢高士

伝注ニミヘタリ

、、

⑲ 約諾 (12ウ)

日本紀一曰、、

骨折集 (6オ)

歴々 (15オ)

▽漢書注凡字当再読者

即於上字之下為小二

字

風流書 (23オ)

約諾日本 (21オ)

⑧木偶 (12ウ)

人形ヲ偶人ト云

ハ土木ヲ以テ人

ノ形ニ対偶スレ

ハナリ史記殷本

紀并前漢公孫賀

伝注ニミヘタリ

、、、

⑨木偶 (12ウ)

、、、又偶人ヲ

傀儡ト云、、、

臨濟録、、、

木偶 人形也
前漢書 (33ウ)

傀儡師 臨濟
録 (19ウ)

以上の二十一例の中には、これまで同様、個別に見ればいずれとも判断しがたいものが多くまじっている。それらの中で、両者の関係をいくらか積極的に裏付けられるかと思われる事実を指摘する。

⑩の場合、反故集に

大格 墳墓

とあるが、実は、墳墓鈔にはハ大格Vの語はなく、ハ外

櫛事Vの項で

物分濟ヲ云時カイカク幾程ト云ハ何事ソカイカクト

ハ片言也外櫛ナルヘシ、、、クワイクワクト云ヘシ

(卷二28才)

と述べているのを、齊東俗談が

墳墓抄物ノ分濟ヲ云トキタイカク幾程ト云ハ片言ナ

リ外櫛ナルヘシ

と引用して、むしろこの説を否定しているのである。こ

れは、反故集が齊東俗談のような記事に拠りつつ犯した

早とちりではなからうか。

⑪の場合、反故集に

約諾紀

とあるが、日本書紀にはハ約諾Vの語は出ない。齊東俗

談では

日本紀一曰即將巡天柱約束曰云云漢高帝紀注ニ約要

也謂言契也、、、

と約の字を解説し、つづいて

字彙諾承領之辭也又以言許人曰諾、、、

と諾の字を解説しているのであって、これも、反故集が

齊東俗談のような記事に拠りつつ犯した早とちりでなかろうかと思われる。

七

齊東俗談卷四「單字部」は、凡例によれば

一有一字取音取義者如曰芸^イ日^ノ能^ノ日^ノ嘖^ハ之^ハ風^ハ也^ハ有^ハ其^ハ字^ハ
無^ハ其^ハ義^ハ者^ハ嘖^ハ云^ハ伽^ハ云^ハ是^ハ也^ハ而^ハ有^ハ雖^ハ無^ハ其^ハ義^ハ循^ハ用^ハ不^ハ廢^ハ者^ハ如^ハ
読^ハ勻^ハ読^ハ完^ハ之^ハ類^ハ也^ハ間^ハ亦^ハ倭^ハ俗^ハ有^ハ造^ハ用^ハ者^ハ子^ハ曰^ハ粉^ハ教^ハ日^ハ猥^ハ是^ハ
也^ハ總^ハ合^ハ而^ハ為^ハ單^ハ字^ハ部^ハ

となる。見出語はハ勅^テ以下八十八語であるが、先の例にならって、反故集の諺字との関連を指摘する。

(齊東俗談)

(反故集)

①嘖^ハ (6オ)

速^ハ不^ハ詳^ハ (25ウ)

、、、近來速字

ヲ天晴^ハノ読^ハトス

イヨ^ハ其^ハ義^ハナ

シ、、、

②草^ハ (15オ)

、、、草稿草按

草子^ハ (26ウ)

共ニ清書セサル

下書ヲ云ナリ日

本ニテ草子^ハト云

モ草稿ノ義ヲト

レリ、、、草稿

ト云字ハ史記屈

原伝並漢孔光伝

ニミヘタリ

③骨^ハ (18オ)

源氏螢ニ骨^ハナク

モキコヘヲトシ

テ橋姫ニケワイ

卑シク詞タミテ

骨^ハナケニモノナ

レタル、、、徒

然草ニ天性ソノ

骨

④点^ハ (18ウ)

人ニ疵ヲサハル

▽草稿義也史記不消

書下書云ー也

骨^ハ (24オ)

▽源氏螢骨ナゲニモノ

ナレタル——徒然草

ニモ天性ソノ骨——

点指^ハ (24ウ)

、コトヲ点サ、
 ルト云源氏盤ニ
 タ、此姫君ノ点
 ツカレタマフマ
 シク、河海
 曰古人詩冊ニ批
 点ナト云ハ聊褒
 貶シタルコ、ロ
 ナリサレハ点ツ
 カルマシキトハ
 人ニホメソシラ
 ルマシキト云義
 ナリ、

⑤ 醕^{カン} (19ウ)

或曰酒ヲ煖コト
 ヲカント云塩齏
 抄^{カシ}醕字ヲカケリ
 、

⑥ 銭^{セン} (20オ)

▽源氏盤タ、此姫君ノ

点ツカレタマフマシ
 ク——河海曰古人詩
 冊ニ批点ナドイフハ
 聊褒貶シタルコ、ロ
 ナリサレハ点ツカル
 マシキハ人ニホメソ
 シラルマジキトイフ
 義也

醕^{カン}酒煖也
 塩齏 (12オ)

、俗又銭^{セン}

ヲ料足ト云、
 、又用脚^{カク}ト云コ
 レヲ以テ足トシ
 用度ヲ弁スルユ
 ヘナリ或要脚字
 ヲ用ヘシ晋魯褒
 銭神論、俗、倭
 俗蛇^セヲ銭神ト云
 モ足ナフシテ走
 義ナルヘシ、
 、羅山文集雜著
 曰、

⑦ 謎^{ナギ} (21オ)

、琅邪代辭
 編三十五云、

料足^{マツ} (9ウ)

▽要脚 銭神論羅文集
 詳也俗蛇^セヲ銭神トイ
 フハ无足而走ノ義也

謎^{ナギ}琅邪代辭
 謎式アリ (17ウ)

以上七例とその数は少く、いずれとも判断しがたいものが多い。ただ、②の場合、反故集の上欄注に

草稿義也史記、不消書下書云一也

とある「史記ニ、」が誤刻でなければ、齊東俗談のような記事によって犯した早とちりと見れなくもないし、また、⑧の場合、反故集の上欄注に「源氏螢、」とあるのは「源氏橋姫、」とすべきところであつて、これも齊東俗談のような記事に拠つて犯した早とちりと思われる。

八

齊東俗談卷五「義訓部」は、凡例によれば

一本無其字有借義名之者如小端ベツク云皆悉云之類也字義

相兼則有愚人シツフツ云匹スル如云之語併蓄而為義訓部

となる。見出語は愚人シツフツ以下七十一語であるが、先の例にならつて、反故集の諺字との関連を指摘する。

(齊東俗談)

①愚人シツフツ(1オ)

、、万葉九詠

浦嶋子歌世間之

愚人シツフツ之吾妹兒爾

(反故集)

愚人シツフツ萬マン(29ウ)

俗コトニ不堪ヲ

シラフト、云ハ

愚人シツフツノ転スルナ

リ

②愚人シツフツ(1オ)

左伝曰、、白

癡シツフツシレモノトヨ

メリ、、

③醜物シツフツ(1オ)

俗ゲスシフ健ナ

ルモノヲシコブ

ツト云日本紀一

葦原醜男アリ、

、、

④匹如スル(1ウ)

野槌曰白氏文集

偶吟詩、、沙

石集第四此詩ヲ

載曰、、

白痴シツフツ左伝(29ウ)

醜物シツフツ健者云一日本紀一醜男(29ウ)

匹如スル身沙石群白文集(34ウ)

⑥片輪 (2オ)

釈氏要覽曰、

、此五所円ニシ

テ上下ニ廻転ス

ルコト車輪ノ如

ナルユヘニ五輪

ト云五所全カラ

サルハ即片輪ナ

リ、

⑧小端 (2ウ)

ハシノスコシミ

ユルナリ、

万葉ニ、

⑦四垂 (2ウ)

万葉ニ乱尾シタ

リヲトヨメリ、

、

⑧入風 (2ウ)

、万葉ニ入

片輪者釈氏要覽 (11オ)

風トカケリ

⑨一 (3オ)

文選長楊賦、

、

⑩月代 (3オ)

、撰集抄ニ

アサマシクヤツ

レタル僧ノ近ク

家ヲ出ニケルト

ミヘテ月シロナ

トアサヤカニミ

ユメリ月代字ヲ

用ヘキニヤ

⑪恒憤 (3オ)

万葉ノ読ナリ、

、

⑫能能 (3ウ)

、字書能能

散毛類、源

一 二選文 (16ウ)

月代抄撰集 (26ウ)

恒憤 (2ウ)

能能 (23オ)

▽字書一散毛貞源氏
幻少シフクダミタル

氏紅葉賀ニ、

、又幻卷ニ少フ

クタミタル髪ノ

カ、リ

⑬不意^{ムナシ}(4オ)

、、源氏夕良

ニイサヨフ月ニ

ユクリナク、

、下郎ノユクデ

モナキト云ハユ

クリナキノ転ス

ルナルヘシ用意

ナキヲ云

⑭無超^{フナナシ}(4オ)

、、河海ニハ

無越トモ閑雅ト

モカケリ、

⑮差是^{シナヤカ}(4オ)

河海曰白氏文集

髪ノカ、リ、今接

俗帽^{ボイ}毛立トイフカ

不意^{ムナシ}義也^{ナシ}(28ウ)

▽源氏夕良月ニユクリ

ナク――

閑雅^{コナヤ}河海^カ(24オ)

差是^{シナヤカ}抄^{セウ}河海^カ(30ウ)

ニ差是ヲシナヤ

カトヨメリ

⑯形勢^{ケウセイ}(4ウ)

野槌曰日本紀ニ

形勢ヲケハヒト

ヨメリ、

⑰形勢^{ケウセイ}(4ウ)

、、新猿楽記

ニ景氣^{ケイキ}トカケリ

⑱塩垂^{シホタタ}(4ウ)

神事式忌詞ニ泣

コトヲ塩垂ト云

源氏須磨ニイタ

フシホタレタマ

フ涙ニテヌレタ

ル絹ヲ塩垂衣

ト云ナリ

⑲端正^{タウテイ}(4ウ)

万葉ノ詠ナリ、

形勢^{ケウセイ}日本^{ニッポン}紀^キ(22オ)

景氣^{ケイキ}新猿^{シンザン}楽記^{ガキ}(22オ)

塩垂^{シホタタ}衣^イ(30ウ)

▽泪ニテ湿タル衣ヲ云

――也源氏須磨ニイ

タフシホタレタマフ

――神式ノ忌詞ニ泣

コトヲ塩垂トイフ也

端正^{タウテイ}萬^{マン}葉^{エフ}(28オ)

②① 声花 (4ウ)

河海曰白氏文集

二声花ヲハナヤ

カトヨメリ

②① 人望 (5オ)

日本紀ニ無人望

ヲスゲナシトヨ

メリ

②② 求食 (5オ)

、、、文選司馬

遷書、、、下郎

ノアヅルトイヒ

アセルト云ハ求

食ナルヘシ

②③ 影護 (5ウ)

河海抄影護ヲウ

シロメダシトヨ

メリ

声花河海 (4ウ)

無人望紀日本 (35ウ)

求食文選 (25ウ)

影護河海抄 (18ウ)

②④ 黄昏 (5ウ)

、、、又黄昏ヲ

コシジト云ハ昏

鐘時ナリ、、、

②⑤ 衡黑 (6オ)

孟津抄ニミヘタ

リ

②⑥ 取次 (6オ)

、、、下学集取

次筋斗、、、

②⑦ 一入 (6オ)

、、、又味ヲコ

クセンタメニ酒

ヲ以テ酒ヲ造ヲ

醕ト云日本紀醕

ヲシホトヨメリ

、、、俗詞ノシ

ホ身ノシホ等醕

字ノ義ナルヘシ

黄昏也 (13ウ)

衡黑抄孟津 (5ウ)

取次筋斗学 (31オ)

醕敷 (31オ)

▽日本紀云以酒造酒云
醕也好味也

②⑧花心(6ウ)

源氏寄木ニ花心

ニオハスル宮ナ

レハ俗始アリテ

終ナキコトラ一

花ト云

②⑨列卒(6ウ)

、、、文選西都

賦、、、

③⑩列卒(6ウ)

万葉ニ射固字ヲ

用フ、、、

③⑪東風(7オ)

万葉十七ニミヘ

タリ越ノ土民今

アイノカゼト云

ナリ

③⑫寒晴(7オ)

、、、韻会日説

花心(4ウ)

▽有始无終云一源氏

寄木花心ニオハスル

君一俗ヒトハナ心

ト云

列卒選文(34オ)

、、、

、、、

射固万(34オ)

、、、

、、、

東風(25オ)

、、、

、、、

、、、

、、、

寒晴(22オ)

▽字書寒私事也晴公界

文、、、衣服ニ

カキラス公界ヲ

晴ト云ワタクシ

コトラ寒ノコト

、云ナリ、、、

③⑬云云(7ウ)

古人ノ語ニ云云

ト云ハ言ノ多義

ナリ、、、

③⑭云云(7ウ)

、、、又然々ト

カキテシカ

トヨムコトモア

リコレハ如此々

々ノ義ナリ、、

、、、

③⑮時勢粧(7ウ)

野槌日白氏文集

新業府ニ時勢粧

也

云云言多義也(31オ)

然々如此也(31オ)

時勢野(2ウ)

トカキテ今ヤウ
スカタトヨメリ

⑤⑥ 分野 (7ウ)

、、、弘決第一

⑤⑦ 方便 (8オ)

、、、万葉二事

計字ヲ用フ

⑤⑧ 販女 (8オ)

源順倭名抄文選

西京賦曰禪販、

⑤⑨ 辭悒 (8ウ)

万葉ノ読ナリ、

④⑩ 伴 嗔 (8ウ)

俗怒コトヲ腹立

ト云、、、日本

分野一弘決 (25ウ)

事計万葉 (14ウ)

禪販選 (32オ)

辭悒萬葉 (2ウ)

辭悒萬葉 (10オ)

發憤日本紀 (18オ)

紀發憤ラムツカ

ルトヨメリ、

以上四十例とその数は他巻に比して圧倒的に多く、これらを全体として見るとき、反故集が齊東俗談と何らかのかかわりを持つてあるうとの思いをますます強くする。しかし、個々の例から兩者の關係を積極的に裏付ける事実を指摘することは、そんなに容易ではない。

⑤の場合、反故集に

片輪者 五輪不全云尔
釈氏要覽

とあるが、『釈氏要覽』には八片輪V或は八片輪者Vの語は出ない。齊東俗談では

長阿含經二肘二膝頭項謂之五輪輪者円転之義也亦云

五体

と釈氏要覽を引いて八五輪(五体)Vの語を示し、そこから

此五所円ニシテ上下二廻転スルコト車輪ノ如ナルユ
へニ五輪ト云五所全カラサルハ即片輪ナリ

と八片輪Vの説明を試みているのである。反故集の注記

の意図が必ずしも分明でないだけに断言はできないが、やはり齊東俗談のような記事をふまえての結果と思われる。

⑫の場合、まず齊東俗談を眺めることにする。

紙ナトノフクタムト云ハ何字ノ麤毛ヲフクタムトヨ

ム此字心地観經ニアリトイフ訓点ノ経アルヲヤ

と塩麤鈔を引用して後、

按「字書」麤毛散毛類獸ナドノ毛ヲフルヒチラスハフ

クタムト云ヘシ

と字書の「麤毛散毛類」によりながら私按を述べ、

つづいて源氏紅葉賀と幻の巻から例を引いている。字書

とあるのは直接に何を指すか知らないが、字彙や正字通

や韻府群玉の「麤毛」の項には

麤毛散毛

と見え、古今韻会には

麤毛散毛

と見える。齊東俗談の著者が、字書に「散毛類」とあるのにそのまま従ったのか、あるいは「毛散類」とあったのを「散毛類」にかえて取り入れたかはいま問わないと

して、少くとも「麤毛」は正しく引いていることに注目しておきたい。見出語を「麤毛」としたのは、直接的には塩麤鈔に拠ったのであるが、字類抄・名義抄以来この形ではある。つぎに、反故集を見ると、見出語はやはり「麤毛」であって、上欄注には

字書「麤毛」散毛貞源氏幻少シフクダミタル髪ノカ、

リー今按俗帽ニ毛立トイフカ

とある。「リー」の略書は、見出しに従って「麤毛」と

認めるべきものである。齊東俗談を大きくとり込んだ

「諺草」(元祿十四年)が

字書「麤毛散毛類獸」などの毛をふるひちらすはふくだ

むと云べし源氏紅葉賀に、

としていることから考えても、反故集の著者が直接字書

を引いたのではなく、齊東俗談のような記事に拠った可

能性が濃いと言えそうである。

⑬の場合、反故集の見出語は「麤毛垂衣」であって、

上欄注に

泪ニテ湿タル衣ヲ云ー也源氏須磨ニイタフシホタ

レタマフ——神式ノ忌詞ニ泣コトヲ塩垂トイフ也

とある。齊東俗談では、見出語が^{シホタル}八塩垂^{ハシホタル}であつて、記事の順序はc b aとなつてゐる。いささか主観的な物言になるが、^{ハシホタル}八塩垂^{ハシホタル}の語の説明をし、シホタルの用例を引き、ついで派生語^{ハシホタル}八塩垂衣^{ハシホタル}をとり挙げた齊東俗談の方が、本来の姿であらうと思われる。したがつて、反故集の著者が偶然にこの三要素をとり挙げたと見るよりも、やはり齊東俗談のような記事からやや手の込んだとり入れ方をしたと見る方が自然ではなからうか。

九

齊東俗談卷六「仮借部」は、凡例によれば

一 震動雷電之字涉物之騒動而転為志多羅顛之聲我他

彼是之音象人之蹺蹻而呼為輕重清濁之響然或有不

曉其義者偽曰字曾危曰比阿伊今取其音義近似者以

名之聊欲觀文字之妙用彼是兼收而為仮借部

となる。見出語は^{ハシホタル}八塩垂^{ハシホタル}以下三十六語であるが、先の例になつて、反故集の謄字との関連を指摘する。

(齊東俗談)

① ^{ハシホタル}曉々^{ハシホタル} (1オ)

墮蘊抄俗物ノ多

コトヲキヤウ

シキト云ハ

業々^{ハシホタル}舗ノ字ナル

ヘシ、文選

甘泉賦、曉

々ノ字マサルヘ

キニヤ、

② ^{ハシホタル}徳々^{ハシホタル} (1オ)

墮蘊抄曰尾州記

、注俗語徳

徳志ト云、

③ ^{ハシホタル}非愛^{ハシホタル} (1オ)

俗危際ニ臨テ稍

其難ヲ逃コトヲ

非愛ト云、

俱舍、

(反故集)

^{ハシホタル}曉々^{ハシホタル} 敷文選

(28ウ)

^{ハシホタル}徳々^{ハシホタル} 志遠 肥人云也

(8オ)

^{ハシホタル}非愛^{ハシホタル} 俱舍

(32ウ)

④ 嗚呼 (1ウ)

俗嗚呼者嗚呼カ

マシ人ヲ嘲笑コ

トナリ、、、或

日嗚呼本嗚呼字

也嗚呼ハ固名ナ

リ、、、

⑤ 旦暮勘 (6オ)

俗旦クレノ儲ナ

ク暮ハアシタノ

蓄ナキラ旦暮ナ

シト云其用意ヲ

スルヲ旦暮勘ト

云、、、又タン

マリハ旦暮余ナ

リ、、、

⑥ 迂詐 (8オ)

、、、或曰ウソ

ハ類ナリ此獸尾

嗚呼者 (9オ)

嗚呼者 (9オ)

▽ 嗚呼固名也

旦暮勘云、物為用意

无旦暮也 (14ウ)

(旦暮余 (14ウ))

類風流土葉 (9ウ)

ヲ以テ人ヲ欺偽

コトアリ其ヲ類

ノタハレ尾ト云

万葉一ニ遊士ト

吾ハキケルヲ宿

カサス吾ヲカヘ

セリヲソノ風流

士、、、

⑦ 封袋 (8ウ)

、、、中ニサセ

ルコトナクテ無

用ノ所ニ結構ス

ルヲ俗封袋ト云

ナリ

⑧ 右流左死 (9ウ)

、、、或曰菅公

時平左右ノ太臣

タリ時平ノ嫉ニ

ヨリテ菅公筑紫

封袋云、俗无結構

(23オ)

右流左死古事

(19オ)

ニ流サレ其靈時
平ヲナヤマシテ

左大臣又死スカ

レコレヨカラヌ

コトヲ右流左死

トハコレヨリイ

ヒツタヘタリ

⑨ 渴々 (10オ)

ゝゝ、俗貧シテ

物ナキコトヲ渴

々ト云

⑩ 愛立 (10ウ)

俗息愛ノ心ナキ

ヲ愛立ナシト云

ナリゝゝ、源氏

螢ニ愛立ナキ御

コト、モ

以上十例とその数は少く、②など存疑扱いすべきものである。しかも、両者の関係を積極的に裏付ける事実

渴々物少ヲ (12ウ)

无愛立 (26オ)

▽源氏螢アイタテナキ

ランコト、モ——

は、残念ながら見当らない。ただ、強いて言えば、次のとき点を指摘できるのみである。

これまで齊東俗談と反故集との関連を考える際に、反故集に注記や上欄注のない語彙は対象とはしなかった。

関連を考える手がかりがつかめないからである。今回の

⑥の例で言えば、齊東俗談の見出語は「迂詐」で

俗偽ヲウソト云ハ迂詐字ナリサトソト舌音相通ス中

華書ニ迂誕ト云ニ同シ或曰ウソハ類ナリ此獸尾ヲ以

テ人ヲ欺偽コトアリ其ヲ類ノタハレ尾ト云万葉一ニ

遊士ト吾ハキケルヲ宿カサス吾ヲカヘセリヲソノ

風流士ゝゝ、

の如き記事を持っており、ここでとり挙げられた「迂詐」は「迂誕」の類ノタハレ尾（風流士）の三語は、そ

ろって反故集にも収められている。このような場合で

も、注記をもつ

類風流士葉

のみを対象として、注記を持たない他の二語は対象としなかった。しかし、⑥の例で注記を持たない「且暮余」は括弧付きであえて併記したのは、齊東俗談の記事中に

出る^ハ旦暮^{ナシ}ナシ^ハ旦暮^勘勘^ハタンマリ^ハ（旦暮^余）^ハが、
反故集においても

无^{旦暮}也 旦暮^勘勘^ハ物^ヲ為^ス用^意
云^ハ一^ハ旦暮^余

とそのまゝの順序で現われるからである。これなど、偶然の一致の可能性（類語として並ぶ）は大いにあるのだが、両者の関連を考える一つの補助資料として指摘しておきたい。

十

齊東俗談卷七「世諺部」は、凡例によれば

一里聞之諺吹^毛求^疵疵^ヲ・綸言如汗之類非無所擷採

録而為世諺部

となる。見出語は^ハ隙駒^{以下}四十一語である。この世諺部における反故集との関連については、はじめに述べた。

以上、齊東俗談の巻別に反故集との関連を検討してきたのであるが、個々の例から両者の関係を積極的に予想させる徴証はそれほど多く見出せなかった。

ただ、先に触れたように、注記や上欄注を持つ反故集

の語彙に限って比較の対象として来たが、

一、反故集の語彙の中で注記をもつものが、たとえば。部では、百十二語中の二十九語程度にすぎない。

二、一方、齊東俗談の語彙は、言語中心である。

の二点を考慮に入れば、両者の相関性はかなり高いものとなる。また、反故集の上欄注は、さらに数が限られる。反故集の上欄には

- | | | |
|-----|------|-----|
| (イ) | 異表記 | 四六件 |
| (ロ) | 増補語彙 | 四四件 |
| (ハ) | 異名 | 二七件 |
| (ニ) | その他 | 一件 |

などもあって、これらを除くいわゆる上欄注（本篇部分に列挙された語に関する上欄注）は、全部で四十五件にすぎない。その中齊東俗談と何らかのかかわりがあるかもしれないとして右に挙げてきたものが二十六件あって、半数以上を占めている。ここにおける両者の相関性はより高いものとなる。

この前提に立って、煩をいとわずに挙げてきた齊東俗談と反故集との類似点を眺めなおす時、全体として両者

の間に何らかのかかわりがあったであろうとする推測は、やはり捨て切れないものがある。

あとがき

反故集の人冊には、諺字が集められている。この反故集の人冊が独立して「世話字尽」と名づけられて同じ版元から出版されたこと、また反故集の人冊を合類式に改題したもの「世話字合類大成」の名称が与えられたことなどによって、諺字を世話字と認めてまず誤りなからうと考えた。収録された語彙自体を眺めてみても、他の世話字尽と比べてそれほどの奇異感はない。ただ、文字の典拠を示したものとことわざ風なものがいくらか目につき、それらが齊東俗談とのかかわりを予想させるきつかけとなったのである。

『世話支那草』（寛文四年）の著者松浦の某と『齊東俗談』の著者松浦黙との関係については、別に論じなければならぬ。世話支那草では、部立が「卷上言葉部」と「卷中言態部」「卷下諺部」とに大きく分けられていた。齊東俗談では、言葉の部分が大きくふくれあがって「卷

一典故部」「卷二凡言部上」「卷三凡言部下」「卷四單字部」「卷五義訓部」「卷六仮借部」に分かれ、逆に諺部が縮小して「卷七世諺部」となる。

この齊東俗談を大きくとり入れた「諺草」は、凡例に「此編にしるせる言語の類を分つ事童蒙の耳なれて見やすければいろはの文字を門にたて、其下にまづ諺の出所あるをしるし次に俗語をしるし次にあやまり唱る詞をしるす」とあるように、まずイロハ分けをし、その内部を「諺」と「俗語」に分ち「正譌」を付している。諺に関して、世俗にとなふる諺猶多なりといへどもあまりにつたなくて出所もなきはもらしぬ出所詳かならざるも又しかり

といった態度をとり、俗字に関しても都鄙にいふ俗語もろこし文に出たるあり吾国の詞あり又仏書に出たるも多し、又俗にいふ詞などのひたすら意義もなく出所もなきを皆是をしるさずと同じ態度を示している。諺草の著者は、出所があるかないかに、いたくこだわっているのである。

われわれが、当時の世話字尽に接したとき、まずその珍妙とさえ言える文字づかいに目をうばわれ、世話字の本質をその点にのみ求めようとしがちである。ことばや文字の出所をかたくななまでに重んずる気質と、外来語を含めた俗語に何がなんでも漢字を宛てようとする意識とは、あい矛盾するものとしてあるように見える。しかし、諺草の著者によって

且時勢風俗よりおこりたる鄙語の文証出所なき
も多しそれをみだりに理を付文をひきしめて本語を
もとめ文字をつくるはかへりて人をまどはすわざな
るへし

と否定された営為は、実はことばや文字の出所を重んずる意識に裏打ちされているものと考えられることもできよう。反故集が齊東俗談を資料としたことがもし明らかになれば、世話字を考える上で一つの興味ある示唆を得られそうに思うのだが――。

注

- (1) 『近世文学資料類従・古俳諧編47』（勉誠社、昭51・9）所収の影印本（柿衛文庫蔵）元祿丙子臘冬余閑案／餘字五三以投書童耳／京寺町二条上ノ町／井筒屋庄兵衛板の奥書・刊記を有する）および東京大学図書館酒竹文庫蔵本（右と同版）の写真に拠る。
- (2) 同『近世文学資料類従・古俳諧編47』の解題（加藤定彦氏執筆）に拠る。
- (3) 『大魁節用悉皆不求人』（「宝永七戊子歲二月良日／書林江戸日本橋須原茂兵衛／大坂堀木町伊丹屋茂兵衛板」の刊記を有する架蔵本に拠る）の上欄付録。
- (4) 『近代語研究第三集』（武蔵野書院、昭47・1）の影印本（東京大学図書館蔵「慶安三庚寅曆／応鐘下流日書之／荒木利兵衛刊行」の奥書・刊記を有する）に拠る。
- (5) ちなみに、反故集入冊三十四丁裏の上欄「千少V」の注文中に「片言集」の名が見える。
- (6) 例外として
空子（29ウ）
がある。後に示す対照表に準じて言えば、和語対類における左傍の音はアツシとあり、字林拾葉における左傍の音はアツシとある。
- (7) 石川県立図書館李花亭文庫蔵本（「天和壬戌年孟冬仲旬／亀屋半左衛門／永原屋孫兵衛板行」の刊記を有する）に拠る。

(8) 「節用集と世語字一」(「世語字一」の文をとりかき) (山田忠雄編「国語史学の為」に「未刊」)。

(9) 勉誠社(昭54・2)刊行の影印本(国立国会図書館亀田文庫蔵「延宝八^{庚申}年仲秋吉日ノ銅駝坊書林平楽寺ノ村上勘兵衛刊行」の刊記を有する)に拠る。

(10) 金沢大学図書館蔵本(「享保十四^{己未}年十一月吉日ノ万屋作右衛門」の刊記を有する)に拠る。齊東俗談を大きくとりあげながら、貞享二年版を見ていないのが心もとない。私の見ることできた享保十四年版には、序跋の類がいっさい無いが、国書解題の解説には

……延宝七年己未「二三九」林楳の序、及自跋、論田植の後序、松浦武の跋等ありて、貞享二年乙丑「二三四五」上梓す。

とある。この序跋をもつ本がもし貞享二年版であるとすると、金沢市立図書館蔵堂文庫蔵の筆写本はそれの写しであるかもしれない。国書解題という序跋の類はすべてそなえている(但し、松浦武は松浦式とある。刊記の写しや後記はない)。この二本を見比べると、巻五の「荒原」Vと「糺明」Vの順序が写本で逆になっているのが、大きな異同として目につく程度である。

(11) 架蔵の「増続会通韻府群玉」(最終巻を欠くため刊記を見ることができない。購入時の古書目録には寛永二年古活字版とある)に拠る。

(12) 金沢大学図書館蔵本(「正保三^{丙辰}」の刊記を有する)

に拠る。

(13) 齊東俗談「吹毛求疵」Vの項が「書言故事曰求多端曰吹毛求疵」で書き出されていることから見ても間違いないだろう。なお「吹毛求疵以求其瑕疵」は、書言故事大全「求疵」V(巻六21才)の項にも見える。

(14) 金沢大学図書館蔵本(「正保四歲正月吉日二条通鶴屋町田原に左衛門梓行」の刊記を有する)に拠る。

(15) 架蔵本(「元禄甲戌歲秋辛日ノ書林上島瀬平ノ長尾平兵衛ノ水谷小兵衛ノ大井七郎兵衛全梓」の刊記を有する)に拠る。

(16) 文明本節用集に「虎狼野干」Vとある。ちなみに、「撰集抄」の「玄牝之事」にコラウヤカンの語が出るが、いま手元にある芳賀矢一氏の名著文庫本(富山房、昭2・9)を見ても西尾光一氏の岩波文庫本(昭45・1)を見ても、いずれも「虎狼野干」Vの字を引き当てている。

(17) 「八若干」Vの左傍訓ソツクリバックリの末尾の二字は、長めの「リ」の字を途中で横に切ったように見える。「ク」を脱落させたことに気付いて誤魔化したものか。

(18) 金沢大学図書館蔵鳥文庫蔵本(「寛永癸酉三月吉日ノ豊雪齋中野道伴刊」の刊記を有する)および同図書館蔵本(「前川茂右衛門尉^開」の刊記を有する)に拠る。

(19) 金沢市立図書館蔵堂文庫蔵本(「元禄十四年辛巳春正月吉日ノ上島瀬平ノ長尾平兵衛ノ田中庄兵衛全梓」の刊記を有する)に拠る。

(20)

反故集の著者の意圖に添えば、「異表記」は「増補諸
集」の中に含めるべきかもしれない。いちおう区別し
た。